

東アジア社会学会 (EASA) 第一回設立大会 参加報告

国際交流委員会

竹中 健 (九州看護福祉大学)

Session 2 は” Sociology of Health 1” の部会として Room410 にて大会初日の 8 日の Morning Sessions として 9:15 A.M. - 11:15 A.M. まで開催されました。朝早くからの部会でしたが、Late Afternoon Sessions の” Sociology of Health 2” の発表メンバーを中心に、発表者と聴衆合わせて 10 名ほどの人数で、穏やかな雰囲気の中プレゼンテーションが進行しました。細田先生の司会は、活発な議論へと導く工夫として発表者と聴衆を一体のものとして、すべての人が発言しやすい雰囲気を創り上げていました。聴衆の一人一人にも簡単な自己紹介を促すことから始め、セッションの終了後には、全員の記念撮影を行うなど、大会で出会ったメンバーが、今後も繋がりあうきっかけを作ることにまで配慮した、非常に良い雰囲気があったように思います。

本学会の設立目的の一つに、若手研究者の国際学会への参加を促すための、一つの敷居の低いステップを提供するという意味合いで、研究者の育成目的で設定されているような気がします。日韓中国の、いずれも英語圏とは全く言語構造の異なった漢字文化圏の研究者たちが、英語を用いて世界標準の研究に、ほんの一步近づけるための機会を提供しているのだというように、私個人は勝手な解釈をしています。私自身は年齢を重ねてはいますが、研究者としては若手、初心者マークの部類に入ります。せっかく立ち上がった学会が、少しでも活発になるようにと、少し無理してエントリーしてしまい、発表直前までエントリーしてしまったことを後悔していましたが、皆さんの貴重な研究を聞かせていただく機会が得られたことに非常に感謝しています。プレゼンテーションや議論に加わるための英語能力は、そうすぐには高めることができないものですが、こうした国際学会に関心のある誰でもが気軽にエントリーでき、発表できる機会がもてるというのは、とても貴重な場所であると思います。多少不完全な研究レベルであったとしても、多少不完全な英語であっても、それをブラッシュアップしてお互いにアドバイスしあえる、そんな和やかな空間でした。とくに今回は、Chiang Mai University から参加された Yongyuth Ruantana 氏の活発な質疑応答により、会場の他のメンバーも発言しやすくなり、発表の途中にも聴衆との間で時には簡単な質疑応答があるなど、聴衆と発表者側との隔たりのない、相互作用の活発な、和やかな雰囲気になっていました。こうした空間が出来上がったのも、司会者の細田先生の親しみのある会場の雰囲気づくりによる結果であったように思います。

発表を予定していた論壇者の、ビザの関係などの様ざまな解決困難な理由による欠席者の多さが取り上げられていましたが、見方を変えると、それだけ発表を思い立った誰もが気軽にエントリーできる機会を提供していたことの裏返しになるかと思えます。金子先生がご説明されていたように、Paper Distributerなどを多めに設定することで、時間の無駄遣いや発表人数の調整は当日にも可能だと思います。厳格で形式化した発表のルールを作り上げるよりも、こうしたフレキシブルで誰にも発表の機会を提供できる、たとえ Paper Distributer として振り分けられたとしても、司会者の配慮により当日残った時間でわずかながらでも発表する機会が得られる仕組みづくりと、「発表に至るまでの敷居の低さ」を大切にしてほしいと、必ずしも優秀ではない「若手」研究者の一人として、私自身はそのように願っています。今回、貴重な機会をお与えいただいたことに、心から感謝しています。